志木市制施行50周年記念特別編集

志木のふるさと芸能

SHIKI 50th Anniversary
志木市制50周年

志木市市制施行50周年を機に
お囃子の魅力を一冊にまとめました。
この先50年、100年と志木の歴史と伝統あるお囃子が
誇りと共に受け継がれていくことを心より願っています。

志木市制施行50周年記念事業実行委員会
委員長　大村相基

志木のふるさと芸能発刊によせて

志木市
郷土芸能団体連合会
会長 **市之瀬 初男**

市制施行50周年記念事業にあたり、『志木のふるさと芸能』が発刊されます事に心よりお祝い申し上げます。

市内の各所に残る郷土芸能、その価値を実行委員会の皆様に評価頂き、ご尽力により刊行すること、これは私達にとってその意義は大きくあらためて感謝申し上げます。

神輿と共に発展した志木市の伝統芸能、お囃子や踊りで盛り上げるだけではない魅力が各団体の持つ里神楽にはあります。

浦安の舞を含む多種多様な芸能をこの冊子を契機に先人の思いを後世に伝えるべく、会員一同研鑽を積む次第です。

志木市長
香川 武文

目まぐるしく変化する時代の中にあって、地域の伝統文化芸能は大切に守られ継承されなくてはなりません。

志木市では、「お囃子」という大切な芸能文化が明治時代より存在し、現在は、志木市郷土芸能団体連合会市之瀬初男会長のリーダーシップのもと、9つの地域で今を生きる子どもたちにも支えられ、しっかりと受け継がれています。

市制施行50周年を記念し、「志木のふるさと芸能」が編集されました。

この記念誌が、郷土愛護の気持ちの醸成と魅力満載の志木市の再発見につながることを、心からご祈念申し上げます。

目次

志木のふるさと芸能発刊によせて　3
志木のお囃子　5
志木市郷土芸能団体連合会の紹介
市場はやし連　6
大塚囃子連　7
上町囃子連　8
久保囃子保存会　9
宿組囃子連保存会　10
中野囃子連　11
宗岡下組囃子連　12
宗岡中組囃子連　13
館地区伝統芸能浦安の舞保存会　14
志木市郷土芸能団体連合会参加行事　15
付録
おはやし豆知識　16
志木の神輿　18
志木の郷土芸能団体紹介　18

志木市内の囃子連

志木のお囃子

志木の囃子のルーツは葛西囃子であり、江戸より中山道や川越街道を経て伝わったと推測されますが、当時盛んであった新河岸川舟運の船頭より伝わった説が最有力で、志木市に現在9団体の囃子連が存在するのも理解できます。（昭和初期には12団体存在したとの話もあります）志木の囃子も曲名は同じであっても内容は変化しており、各囃子連独特の曲となっております。

囃子にあわせて踊る舞は、基は里神楽舞ですが、一連の農作業が題材になっています。

種まき・草刈・代掻き・田植え・田の草取り・田廻り・穂ばらみ・稲刈り・脱穀・粉挽き等を面白おかしく舞います。

志木市郷土芸能団体連合会の紹介

『栄枯盛衰』腕自慢の花形囃子連。それが突然の離脱、理由は奏者が倒れ代えがいない。高齢化や後継者難は郷土芸能団体共通の問題という気運から、今後を見据え「平成8年9月」市内11団体で連合会が結成されました。

現在9団体になりましたが、伝統文化の継承、担い手の育成を積極的に行なっています。

■加盟団体

市場はやし連
大塚囃子連
上町囃子連
久保囃子保存会
宿組囃子連保存会
舘地区伝統芸能浦安の舞保存会
中野囃子連
宗岡下組囃子連
宗岡中組囃子連

市場はやし連

明治初期には存在しており、明治中期に、東京の小松川より引又河岸に働きに来ていた船頭の三上松五郎より葛西囃子を習得したが大正末期に途絶える。

現在のお囃子は、当時の市場の囃子を受け継いでいた、富士見市水子の城ノ下囃子連より昭和47年に伝授する。

現在は、夏祭りに向けて毎年町内の小学生が祭りに楽しく参加してもらえるようお囃子、踊りを指導している。

■系統・流派
江戸囃子系 神田囃子

■発足年月
昭和48年

■曲目
屋台、仁羽、子守唄、仕丁目、鎌倉

■演目
獅子舞、天狐、おかめ、ひょっとこ、外道

■主な活動
1月 敷島神社 歳旦祭（隔年）
7月 敷島神社祭典
敬老会、介護施設等

■活動拠点
本町市場地区
（市場町内会館）

■練習日
週一回

大塚囃子連

明治24年、尾崎吉五郎、高野新太郎、大野藤五郎らが三芳町竹間沢より伝授を受けたというが、現存の小太鼓には安政6年（1859）と記されているので発足はそのころであろう。ただ中断した時期があり明治中期に再興された。

「重松（じゅうま）流」を本源とする「神田ばやし」である。

■系統・流派
江戸囃子系 重松流
三芳町竹間沢より伝授

■発足年月
明治24年

■曲目
昇殿、鎌倉、仁羽、四丁目、屋台、中の切り、神田丸

■演目
獅子、狐、外道
おかめ、ひょっとこ

■主な活動
1月　獅子舞
7月　郷土芸能フェスティバル
　　舘氷川神社祭礼

■活動拠点
大塚町内地区
（大塚町内会館）

■練習日
行事前一か月間
火・金曜日

上町囃子連

昭和44年上町地区在住の有志により「上町天狗囃子連」として発足。

現在は、40歳代が中心となり伝統芸能を継承していくと共に新しい事にも積極的に挑戦していく活気のある団体である。

また、「子供はやし」にも力を入れており、伝統芸能を身近に感じ体験することで自分たちの住む街に愛着を持ってもらえるよう地域に密着した活動をしている。

■系統・流派
江戸囃子系 神田囃子
宿組囃子連保存会より伝授

■発足年月
昭和44年4月

■曲目
仁羽、屋台囃子、四丁目、
鎌倉、ねんねこ

■演目
獅子舞、天狐、外道、
おかめ、ひょっとこ

■主な活動
1月　敷島神社 歳旦祭（隔年）
7月　田子山富士 山開き
7月　敷島神社祭典

■活動拠点
本町上町地区
（上町町内会館）

■練習日
毎月第一、第三土曜日
午後七時～

https://fb.me/kamicho.shiki.2014/

久保囃子保存会

現東久留米市 神山八軒より伝授。神山流を根源とする神田囃子である。「神山（こうやま）ばやし」ともいわれている。

近年継承者不足により活動を休止する期間もあったが、活動を支える後継者として数名加わり、地域全体でも伝統芸能を守っていこうと盛り上がっている団体である。

■系統・流派
神田囃子 神山流
東久留米 神山八軒より伝授

■発足年月
明治初年

■曲目
仁羽、屋台、乱拍子

■演目
獅子舞、天狐、ひょっとこ、おかめ

■主な活動
7月 久保の夏まつり

■活動拠点
幸町久保地区
（久保共励館）

■練習日
月一回

宿組囃子連保存会

三番叟と志木市無形民俗文化財

お囃子のはじまりは、明治7、8年頃、宿組八坂神社でのお囃子の奉納と伝えられている。

里神楽は芝居仕立ての内容となっており、「三番叟（五人囃子）」「獅子がまい」などである。

幅広い年代の参加者において、囃子、里神楽を伝承している。

新作などにも意欲的に取り組んでいる。

■系統・流派
江戸囃子系 神田囃子

■発足年月
明治初期頃
保存会は昭和44年

■曲目
仁羽、屋台囃子、四丁目、鎌倉
数え唄、ねんねこ、きつねつり

■演目
三番叟と五人囃子
天狐、獅子舞、獅子がまい、銭拾い
おかめ、ひょっとこ他

■主な活動
4月　天神社例大祭
7月　八坂神社祭礼
7月　敷島神社祭典
郷土芸能フェスティバル

■活動拠点
中宗岡天神社社務所

■練習日
毎週水曜日、金曜日

https://fb.me/Saitamaprefecture.Shikicity/

中野囃子連

明治41年にはじまり一度は途絶えたが、昭和52年富士見市水子「石井囃子保存会」より伝授、復活した。

現在は、小学生から70歳代まで幅広いメンバーで活動し、他の囃子団体との交流も積極的に行なっている。

また、正月には獅子舞で町内を回るなど地域の伝統芸能を身近に感じてもらえるような取組みをしている。

■**系統・流派**
江戸囃子系 神田囃子
富士見市水子石井囃子保存会より伝授

■**発足年月**
昭和52年

■**曲目**
仁羽、仕丁目、屋台囃子

■**演目**
獅子、狐、おかめ、ひょっとこ

■**主な活動**
1月　舘氷川神社元旦祭
（大塚・久保・中野・城 年次交代）
1月　獅子舞（中野・柏町内会）
7月　郷土芸能フェスティバル

■**活動拠点**
中野町内会館
（クラブ中野）

■**練習日**
毎週水曜日

宗岡下組囃子連

大正期発足。

明治初期に原形はあったが、大正末期に大宮市遊馬出身の金子嶽吉の紹介で、大熊兼助、木下芳太郎、荒井市太郎らがこの地より伝授を受けた。

下ノ宮氷川神社を拠点とし宗岡五区、六区が中心であり、小学生、中学生が元気に活動している団体である。

また、地元小学校で郷土の歴史、伝統芸能等を題材に社会科授業の一環で講義を行うなど文化伝統の継承にも熱心である。

■系統・流派
江戸囃子系
大宮遊馬（現さいたま市大宮区）より伝授

■発足年月
大正期

■曲目
屋台、仁羽

■演目
おかめ、ひょっとこ、狐、獅子

■主な活動
1月　下ノ宮氷川神社 元旦祭
5月　下ノ宮氷川神社 春祭礼
7月　下ノ宮八坂神社祭礼
郷土芸能フェスティバル

■活動拠点
下ノ宮氷川神社 社務所
（宗岡 五区、六区）

■練習日
祭礼一か月前より毎週日曜日

宗岡中組囃子連

中組囃子連は、昭和51年発足。

宗岡三区を中心に活動しており、毎年「産財八坂神社祭礼」、「郷土芸能フェスティバル」等で活躍中。現在、会員数も増え熟練者と若い力で頑張っている。

お神楽では、伝統芸能の基礎である「四方固め」「カンカンノ」「蝶々トンボ」など、これからの子供たちに伝授している。

■**系統・流派**
江戸囃子系 神田囃子
お囃子・宿組囃子連保存会より伝授
踊り・富士見市水子 新井氏より伝授

■**発足年月**
昭和51年

■**曲目**
屋台囃子、仁羽、鎌倉、
四蝶目、ねんねこ

■**演目**
獅子舞、天狐、おかめ、
ひょっとこ、だんな踊り

■**主な活動**
7月　産財八坂神社祭礼
7月　敷島神社祭典
郷土芸能フェスティバル
8月　宮戸神社祭礼（朝霞市）

■**活動拠点**
産財氷川神社境内（宗岡三区）

■**練習日**
行事二か月前より毎週土曜日、
日曜日

舘地区伝統芸能浦安の舞保存会

舘地区伝統芸能「浦安の舞」保存会について

浦安の舞は、紀元 (皇紀) 2600 年に当たる昭和 15 年 11 月 11 日に舘氷川神社記念行事として奉納され、その後神社における神事の一環として執り行われましたが、戦後新憲法に基づく信仰の自由の中では、宗教色が払拭され伝統芸能として継承されてきました。

平成 18 年財団法人伝統文化活性化国民協会が、伝統文化こども教室の助成事業を行っていることを機会に、その助成対象の適格性を得るため、宗教法人の組織より独立し、地域住民の幅広い協力並び支援を得てさらなる普及発展を願い、終わりなき継承を図るため、任意団体**舘地区伝統芸能「浦安の舞」保存会**が創設されました。

浦安の舞について

「天地の神にぞ祈る朝なぎの海のごとくに波たたぬ世を」

昭和 8 年昭和天皇御製をもとに昭和 15 年、皇紀 2600 年を奉祝して時の宮内省楽長・多忠朝 (おおのただとも) 氏により作曲振付されたのが「浦安の舞」で、昭和 15 年 11 月 10 日午前 10 時に全国の神社で一斉に奉納されました。

今日では、神前神楽の代表的な一つとして多くの神社で盛んに舞われています。

浦安とは心安らかという意味で、古く我が国が浦安の国とも呼ばれたのは、風土が美しく平和な国であったからです。

この舞は、正式には十二単を身にまとった 4 名の神舞姫 (みこ) が扇と鈴とを手に舞うもので、前半の舞扇は祝いの象徴である檜扇 (ひおうぎ) の、要 (かなめ) を中心に豊かに開けゆく中心帰一の世界を表現しています。

後半の鈴舞は、三種の神器を象った鈴を手に舞い、その清らかな音色が万物を浄め、美しい響きが神と人との心のふれあい、喜びを意味しています。

舘氷川神社では、2 月中旬の祈念祭・4 月 11 日の例大祭・11 月中旬の新嘗祭の祭典に奉納されています。

志木市郷土芸能団体連合会会員参加行事

4月　舘氷川神社　奉納演舞　（伝統芸能浦安の舞保存会）
宗岡天神社　例大祭　（宿組囃子連保存会）

7月　宿組八坂神社祭礼　（宿組囃子連保存会）
下ノ宮八坂神社祭礼　（宗岡下組囃子連）
産財八坂神社祭礼　（宗岡中組囃子連）
敷島神社祭典　（市場はやし連）
（上町囃子連）
（宿組囃子連保存会）
郷土芸能フェスティバル
（大塚囃子連）
（中野囃子連）
（宗岡下組囃子連）
（宗岡中組囃子連）
（伝統芸能浦安の舞保存会）
久保の夏まつり　（久保囃子保存会）

11月　舘氷川神社　奉納演舞　（伝統芸能浦安の舞保存会）

1月　元旦祭・歳旦祭
下ノ宮氷川神社（宗岡下組囃子連）
敷島神社　（市場はやし連）
（上町囃子連）
舘氷川神社　（伝統芸能浦安の舞保存会）
獅子舞
中野・柏町地区（中野囃子連）
大塚町内地区　（大塚囃子連）

2月　舘氷川神社　（伝統芸能浦安の舞保存会）
旧村山快哉堂
「雛のつるし飾りとお囃子」（各団体 持回り）

編集後記

市民の皆さんに郷土の伝統、文化に触れていただく機会として記念公演「ふるさと芸能のつどい」が企画され、舞台パンフレットとして本誌の制作が始まりました。

令和2年に世界中で流行した未曾有の感染症の影響をうけ、祭りやイベントが中止になる中、「ふるさと芸能のつどい」も例外ではなく中止となってしまいました。

このような情勢の中、先人の思いと共に志木に残る郷土の文化、民俗芸能の魅力をこれからの時代を担う子どもたち、そしてこの土地、地域を愛する皆さんへ伝えるアイテムとして本誌を発行できたことを、心より感謝申し上げます。

志木市制施行50周年　記念事業実行委員会
上町囃子連　坂本勉

写真提供　志木市郷土芸能団体連合会
志木ニュータウンみこしの会
志木市

参考文献　埼玉の祭り囃子Ⅶ・志木市郷土誌

監　修　志木市教育委員会

編集 発行　志木市制施行 50 周年記念事業実行委員会
協　力　志木市郷土芸能団体連合会

発　行　令和３年２月

問合せ先　志木市教育委員会 教育政策部 生涯学習課（048-473-1111）

おはやし豆知識

■お神楽とは？

日本人は叙情的な農耕民族で、月に酔い、花に酔い、宴に酔い、舞に酔い、酔うということに対して寛容な文化があります。

神話では、天照大神が天の岩戸に隠れられた時、御神の心を動かし、お出ましを祈る神事として、天の岩戸の前で宴を開きました。その時おもしろおかしく舞われたのがお神楽（かぐら）です。

お神楽には宮中で行う御神楽と、民間で行う里神楽があります。

里神楽の代表的なものとして獅子神楽・巫女神楽があり、獅子神楽は、獅子舞で、唐から伝わった神楽です。一人で獅子頭を付けて舞う獅子舞は、鎌倉時代に生まれました。巫女神楽は、巫女が鈴を持って舞うもので、現在も各神社で目にする雅楽です。

神楽には、笛・太鼓・鉦が付き物で、お囃子や歌舞伎は神楽から庶民好みに変化したものとされています。

■お囃子のルーツ

祭り囃子は、江戸時代の葛西（江戸川区葛西）が発祥の地と言われています。

昔、葛西の土地の若者は気性が荒く手が付けられないほどであったのを、香取明神の神主・能勢環が笛・太鼓・鉦による囃子を考案して教えた所、すっかり若者たちは夢中になった。また、京の祇園囃子を伝習した香取明神の神主・能勢環が創作し、代官伊奈半左衛門が広めたとの説もありますが、何れにせよ葛西が囃子の発祥の地であることは定説となっています。

宝暦３年（１７５３年・九代将軍徳川家重）のころ、この葛西の囃子は神田神社（神田明神）の祭に呼ばれていましたが、神田神社の器用な人達が葛西の囃子の真似をして演奏したのが、神田囃子の発祥となりました。（神田明神の祭は、神輿が江戸城内に入れました。）

当時の曲目は、前屋台・昇殿・鎌倉・仕丁舞・玉・後屋台・投遣り・寿獅子・任羽であり、笛をトンビ・締太鼓をシラベ・大太鼓をオウド・鉦をヨスケと呼び、笛一人・締太鼓二人・大太鼓一人・鉦一人の五名で演奏していました。

これらの葛西囃子や神田囃子は、江戸の大名や旗本の肝いりで、江戸より諸街道を曲名は同じであっても変化して伝わり又、その土地柄により新しい曲も生まれました。

近くの川越は、慶安４年（１６５１年）松平信綱が氷川神社に神輿と獅子頭を寄進して以来、祭り囃子が生まれ、盛んになったと言われています。

■天狐

天狐とは、狐たちの間の最上位にあたる存在の呼称である。千年生きるとなれるといわれる。

千里の先の事を見通す。尾の数は九尾。野狐、気狐のように悪さをすることはないと語られている。

お神楽では、キツネの面をつけ、主に「屋台囃子」で踊る。

手足をキツネのように動かしたり、幣束（へいそく）などを持って舞う。太鼓のキリに合わせて、切れ間に見得（みえ）を切る。

■獅子

魔除け、五穀豊穣を願う舞である。

獅子が頭を噛むと邪気を食べてくれるなどのご利益があるとされることから疫病退治や無病息災で元気に過ごせると伝えられている。

また、獅子が噛み付くから「神がつく」などの語呂の良さから縁起担ぎの意味も含まれている。

市内のお囃子では一人一匹の獅子を演じる「一人立の獅子舞」が主である。

「屋台囃子（やたいばやし）」、「宮昇殿（みやしょうでん）」、「鎌倉」などで踊る。

■ひょっとこ

ひょっとこは、口をすぼめて曲げたような表情の面のこと。

面を付けた人は頬被りをすることが多い。女性の「おかめ」（おたふく）と対にあつかわれることもある。

ひょっとこは祭礼における舞いや踊りの中での道化役として登場する。

「にんば」の曲で踊る。種まき、鍬（くわ）仕事を表現してみせる。

いくつかの踊りの基本の手（動作の一区切り）があり、それを基に個人で工夫を加えて踊る。

■おかめ

おかめは、古くから存在する日本の面（仮面）の一つである。丸顔、鼻が低く丸く、頭が小さく、垂髪、頬が丸く豊かに張り出し（頬高）特徴をもつ女性の仮面であり、同様の特徴を持つ女性の顔についてもそう呼ぶ。

「にんば」で手踊りをして、「鎌倉（かまくら）」でお化粧をし、子守唄で子どもを抱いて寝かしつける仕草をする。数え歌では、毬つきや扇子を羽子板にして羽根つきをします。踊る姿は控え目で、女性の優しさを醸す場面が多い。

志木の神輿

敷島神社 二之宮

敷島神社 一之宮

中組の神輿

宿組の神輿

志木ニュータウン

下組の神輿

志木の郷土芸能団体紹介

宿組狐童連

平成10年発足

演舞神楽狐童は古くから飢餓や疫病の蔓延を恐れ五穀豊穣、天下泰平を願って演じられてきた天狐の舞をもとに西暦二千年を記念し創作されたものである。

天狐の志しに感銘を受けた村の沢山の若者達が狐童として従い、世の悪行に挑む勇ましい姿を迫力ある踊りで表現する。

演目曲である「四丁目」「玉」を、お囃子の軽快なリズムと3尺の桶胴太鼓の響きが合わさり舞と共に狐童の世界観を創造している。

SHIKI 50th Anniversary
志木市制50周年

城はやし連

明治中期発足

明治時代頃から行っていたと思われるが、正確なことはわからない。戦後神楽師の石山氏から芝居を教わり、祭りなどで芝居を行ったこともある。

柳太鼓

志木市文化協会会員

昭和48年発足

志木町東町の盆踊りで太鼓の柳沢長吉氏（葩島典水氏に師事）にあこがれた若者が集まり、昭和48年に盆太鼓集団が結成された。

匠太鼓

志木市文化協会会員

昭和61年に匠会を結成した後、山田流太鼓の資格をもつ女性の方たちなどが中心となり、匠太鼓を発足した。

いろいろな曲にあわせて民謡太鼓、和太鼓、面太鼓、銭太鼓等を演奏し、市民文化祭や芸能祭等に出演している。

杜の太鼓

志木ニュータウンの夏祭で誕生し、盆踊り・学校運動会・郷土芸能祭等への参加、公民館や文化庁事業の太鼓教室開催など、幅広い年齢層の会員が地元に密着した活動を行っている。

踊り手を盛り上げる盆太鼓、2尺大太鼓が勇壮に打響く組太鼓で皆様に喜んで頂き、元気をお届けするとともに、和太鼓という素晴らしい伝統文化の伝承を目指している。